

Digest of Science of Labour

労働の科学

2022
September
Vol. 77, No. 9



コスモス in プリズム／山本美智代

特集

女性の力で未来を拓こう

ジェンダー平等で食と農の危機を乗り越える／藤原麻子
働きつづけられる職場へ 明るく楽しく活動／小澤晴美
地域を支える中小企業の女性たち／土井淳子

連載

ILOインド・南アジアこぼれぼなし⑬

川上 剛

漂流者たち—クミジョの肖像⑮

本田一成

凡夫の安全衛生記⑥

福成雄三

巻頭言

「二つの大きな出来事」と「今」

松下英爾

連載

芸能従事者の今⑭

森崎めぐみ

労研アーカイブを読む⑧

椎名和仁

労働の科学

2022
September
Vol. 77, No. 9

巻頭言

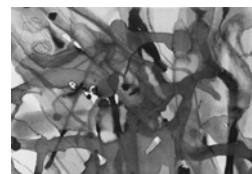
俯瞰（ふかん）

「二つの大きな出来事」と「今」

松下 英爾 [行政書士]

1

表紙作品：山本美智代
「コスモス in プリズム」
ドローイング（15×21cm）
表紙デザイン：大西文子



女性の方で未来を拓こう

ジェンダー平等で食と農の危機を乗り越える

..... [農民運動全国連合会] 藤原 麻子 4

働きつづけられる職場へ 明るく楽しく活動

..... [全国印刷出版産業労働組合総連合会] 小澤 晴美 9

地域を支える中小企業の女性たち

..... [全商連婦人部協議会] 土井 淳子 13

Graphic

写真でみる労研の歩み (7)

..... 口絵

Series

芸能従事者の今 (14) ハラスメントの現況	森崎 めぐみ 17
ILOインド・南アジア こぼればなし (17) インド, マンガロール市のビーディータバコ家内職場 ―職場における暴力とセクシャルハラスメント対策―	川上 剛 24
「#教師のバトン」で伝わる (16) 教員不足の現状と解決に向け, 何からはじめるべきか	藤川 伸治 29
労研アーカイブを読む (80) カーレースゲームによる攻撃行動の傾向	椎名 和仁 32
漂流者たち クミジヨの肖像 (18) 『クミジヨ白書2019』 (6)	本田 一成 38
凡夫の安全衛生記 (67) 「さまざまな組織・立場で⑤」 責任を感じながら	福成 雄三 40

Column

Talk to Talk 歩み重ねつ	肝付 邦憲 42
KABUKI 元禄忠臣蔵『御浜御殿綱豊卿』 歌舞伎で生きる人たち その十六——こつこつと	湯浅 晶子 44
つれづれなるままに 汗とミネラルと熱中症	千葉 百子 47
BOOKS 『世界を救うmRNAワクチンの開発者カタリン・カリコ』 ワクチンの女神	椎名 和仁 53
『NFTの教科書 ビジネス・ブロックチェーン・法律・会計まで デジタルデータが資産になる未来』 注目されるNFTの可能性を解説	川村 正太郎 54
労働科学のページ	55
次号予定・編集雑記	64



「二つの大きな出来事」と「今」

松下 英爾

今は「労働者」としての役割から離れ、「俯瞰」する力もありませんが、この機に、自分にとって二つの大きな出来事を振り返ってみると、本誌への寄稿へ、そして今の自分の「働き」へと導いてくれた「人との出会い」つながりがありました。二つの大きな出来事（過労死認定の取り組みと2年半後の雲仙・普賢岳噴火）を軸に、「今」へのつながりについて書かせていただきます。

本誌に2017年と、昨年から今年にかけて計4回、1990年に始まる雲仙・普賢岳噴火災害時の労働安全衛生の取り組みと災害記憶の伝承について書きました。そもそもそれらの寄稿は、普賢岳噴火災害の最中、一昨年まで本誌の編集者であった原知之さんとの出会いが発端でした。

噴火が始まる7年前の1983年、当時39歳の島原市役所職員が公務中に脳出血で倒れて亡くなりました。当時、私が市職組の書記長をしていた時、奥さんが公務災害認定の相談に来られて始まった過労死認定の闘いは、「暈の上で死んでも労災は労災」の本をバイブルに、名古屋水道労組や自治労などの支援のもと、署名活動や口頭意見陳述等を経て県支部審査会で5年後に勝利しました。実はその過労死認定の取り組みが原さ

んとのつながりの「原点」でした。過労死認定の2年半後、市職組の委員長になったその月に普賢岳が1988年ぶりに突如の噴火を始めます。噴火終息宣言まで5年半を要した災害下、過労死認定の経験とその時の自治労とのパイプなどをテコに、健康調査アンケートや当局交渉、定期健康診断の回数増など、「過労死を繰り返さない」取り組みにも注力していました。それらの取り組みが原さんの目にとまり、当時、自治労安全衛生対策室と連携・協働していた自治体労働安全衛生研究会が発行した『自治体安全衛生研究』第16号（1997年10月）の「大災害時の安全衛生」特集に、「雲仙普賢岳噴火災害と安全衛生―過労死の教訓は、噴火災害とのたたかひに受け継がれた」と題した拙論が載ることとなりました。それが、原さんとの出会いから、幸いにも本誌の「今」へとつながる発端でした。2015年に島原市役所を定年退職後、島原城勤務を終え、「個人事業主」として行政書士の看板を掲げました。中身は、入国したばかりの外国人技能実習生に対する労働関係法令等の法定保護講習などが中心ですが、この「働き」も発端は噴火に関わる「人との出会い」でした。防災係長時の火山学者との出会いが縁で2007年にアジアで初めて開い



まつした えいじ
行政書士
しまばら半島国際交流クラブ代表

た火山都市国際会議島原大会の終了後、そこで活躍した外国語ボランティアの間らと国際交流サークルを作って活動していたことが多文化共生とつながる行政書士になるきっかけとなりました。

その後のご縁で朝日新聞の地元契約記者（通信員）にもなつて3年目に入りました。労災認定と普賢岳噴火での「人との出会い」が発端となった本誌への寄稿や多文化共生、集めた災害資料の雲仙岳災害記念館での公開展示なども心と身体の「安全衛生」があつてこそ、と自分に言い聞かせながら、『労働の科学』で知る多彩・多才な方々、生き方にも学びつつ、これらの活動を、これからの残されたライフワークとして精一杯続けられたら、と願っています。